

# やおいをめぐる言説の構成

相 田 美 穂

(受付 2015年5月27日)

## 1. は じ め に

本稿の目的は、やおいという言葉には特別な定義があるのではなく、言説によって構成されてきたことを示すことを通じて、やおいが、「男性同士の恋愛を扱った作品」として扱われることが、ジェンダーの観点から女性の愉しみに対してどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることである。

やおいとは、1970年頃に、同人誌において登場した言葉であると言われ（後述）、女性が読んだり描いたりする男性同士の恋愛を扱った物語を意味している。やおいの特徴は、やおいに登場する男性キャラクターが、性交時の役割に基づいて受けと攻めに分類されことである。受けキャラクターは、性交時に挿入される側、攻めキャラクターは、挿入する側をさしている。

女性向けに男性キャラクター同士の恋愛や性交を描いた作品をさす名称は、やおいだけではない。1990年代には、ボーイズ・ラブ (BL) という言葉が生まれ、現在では、一般の書店やネット書店の分類として目にする事ができる。1970年代には、少女漫画の領域で「少年愛」と呼ばれる作品が発表された。少年愛は、竹宮恵子、萩尾望都ら「24年組」と呼ばれる少女漫画家の手による、少年同士の性交を含む恋愛関係を描いた作品をさす。同じく70年代には、女性向けに男性同士の恋愛や性交を描いた作品の専門誌『JUNE』（第二号までの名称は『JUN』）が創刊され、「JUNE」の名称もまた、女性向けに男性キャラクター同士の恋愛や性交を描いた作品をさすようになった。名称では、「耽美」が使用される場合もある。女性向けに男性キャラクター同士の恋愛や性交を描いた作品に対して、1970年代から数えても、少年愛、やおい、JUNE、耽美、BLと、異なる名称が現れている。異なる名称のものが異なる意味をもつとは限らないが、やおいに関する先行研究では、名称の違い自体に注目し、違いには意味があるのか／ないのか、あるとすれば、名称の違いはどのような意味を持つのかという視点をもつものはない。主な論点は、受けキャラクター、攻めキャラクターの描かれ方とジェンダーやセクシュアリティの規範との間に関係を見出すもの、腐女子であることがコミュニケーションに与える影響といったものである。やおいを、〈解釈共同体〉とする議論では、違いではなくやおいをめぐる愛好者の絆に焦点があたる（笠間 2001）、（金田 2005）。僅

かに、千田由紀（2010）では、千田自身がボーイズラブを愛好する立場から、少年愛とボーイズラブのつながりと、受け攻めにこだわるやおいのような愉しみのあり方の間の違いに言及しているのが認められる。

本稿では、はじめに、やおいは言説によって構成されているカテゴリーであることを示す。やおいをめぐる評論や研究が、やおいとして語っているものを整理していくと、やおいをめぐる言説において、やおいを構成する要素が、常に変化しており、変化の中には、「違い」が現れていることが指摘できる。次に、違いに言及している千田や、永久保陽子（2005）を参照しながら、女性の愉しみという視点から、違いを考察していく。

考察を通じて、「違い」は、女性の愉しみの多様さに結びついていることを示し、やおいの「違い」に注目することが、女性の愉しみの多様性を論じることにつながることを、明らかにする。

## 2. 言説が構成する「やおい」

本稿で言及する、やおいをめぐる言説は、1979年から2010年までとする。やおいという言葉を使い始めたのは、1979年発行の同人誌『らっぽり』とその周辺であるという指摘による（佐々木 2005: 414）、（ヤマダ 2007: 123）。

### 2.1 やおいはじまり

同人誌『らっぽり』には短編漫画とイラスト、「対談」が収録されている。「対談」参加者の発言から、やおいに言及する部分を拾っていくと、やおいという言葉は、「山なし落ちなし意味なし」の頭文字をとっていることがわかる。漫画には「山」「落ち」「意味」の三つが必要だという前提のもとで、その三つが「なし」、つまり、描かれていない漫画が「やおいまんが」である。

「やおい」というのは、「や」は山なし、「お」は落ちなし、「い」は意味なし、というまんがの三原則を追求した形式のことで、この形式にのっとってかかれたものが「やおいまんが」です。言葉を変えれば「三無主義形式」とでもいいましょうか…。(磨留の発言/波津他 1979→2001: 320)

発言者の磨留は、やおいは、「山なし落ちなし意味なし」という「まんがの三原則を追求した形式」だとしている。そこで「やおいまんが」が、どのような漫画をさすのかについて、『らっぽり』に収録された漫画作品をみると、男性キャラクター二人の性交の場面が描かれている。キャラクター同士が性交にいたった背景は、会話や回想として示されるが漫画には描かれない。性交前後の物語は、作中には描かれていないために、読者の想像で補うこと

になる。

性交が描かれ、背景となる物語は描かれない漫画を、磨留は「やおいまんが」として、次のように述べている。

「やおいまんが」というのは、話の流れの中のひわいな部分だけを独立させたものなのです。  
(磨留の発言／波津他 1979→2001: 320)

磨留の発言では、「話の流れの中のひわいな部分」を描いたものが「やおいまんが」ということだ。「ひわい」という言葉でもって、磨留が何をさしているかは説明がないので分らないが、『らっぽり』収録の漫画に描かれているのが性交であることをみると、「ひわい」に性交は含まれていると思われる。

「対談」中で示されたやおいは、次の二つの要素で構成されている。

- ①山なし落ちなし意味なし
- ②ひわいな部分だけを独立

この二つを含め、以降に登場する事柄は、本稿においてはやおいを構成する「要素」という他には意味を求めない。本稿の目的は、先に触れた通り、やおいという言葉の意味は変化し続けるものだというを示し、違いを指摘していくことだからである。

## 2.2 パロディとしてのやおい

この節では、八〇年代以降のやおいをめぐる言説において、やおいに「同人誌」、「パロディ作品」という説明が加わっていくことを示す。これらは、『らっぽり』では触れられていない「新しい」要素である。

編集者で、まんが論や批評を行う大塚英志は、1988年のエッセイで、『キャプテン翼』のパロディ同人誌をやおいの「代表」としている。

女の子たちによる女の子たちの同人誌コミックの一大勢力があり、それが「キャプテン翼」のパロディコミックに代表される〈やおい本〉と呼ばれる同人誌なのである。〈やおい〉とは、「ヤマなし、オチなし、イミなし」の略といわれ、要するに女の子の手による美少年ホモSEXまんが、の事を指す。(略) もちろん、SEXものじゃない作品もあるのだけれど、美少年モノ、というのが大前提。(大塚 1988→2001: 186)

大塚では、「同人誌コミック」の中での「一大勢力」が、〈やおい本〉で、〈やおい本〉の代表は、「キャプテン翼」の「パロディコミック」だとしている。大塚が提示しているやおいを

構成する要素は、「コミック」、「同人誌」、「パロディ」の三点である。

さらに、大塚は、〈やおい〉は、「女の子の手による」「美少年ホモ SEX まんが」とする。描き手は「女の子」で、描かれているのは、「美少年ホモ SEX」という要素が加わる。『らっぼり』が示した要素を、大塚はある程度引き継いでいる。「ヤマなし、オチなし、イミなし」（山なし落ちなし意味なし）への言及と、「美少年ホモ SEX」が性交という意味で、「ひわいな部分」と結びつくことである。

「パロディ」は、栗本薫の名で知られる小説家であり、おたくややおいの批評を著した中島梓も、やおいの説明に用いている。

マンガ、アニメのマニアであるところの、元祖おたくたちが、まずたくさんのマンガ、アニメ、ビデオの作品群のなかから、特定のいくつかの、かれらの幻想のなかに共同化されやすい要素をもった作品——たとえば「キャプテン翼」や「宇宙戦艦ヤマト」や「北斗の拳」や「聖闘士星矢」といった作品をまず選びだし、それからそれを模写し、パロディとし、いわゆる「やおい本」を作っていく。(中島 1991: 52)

やおいをめぐる、中島は、「キャプテン翼」や「宇宙戦艦ヤマト」や「北斗の拳」や「聖闘士星矢」と具体的な作品名を挙げ、「元祖おたくたち」が、「それを模写」「パロディ」として、「やおい本」を作ったという。中島のいうやおいを構成する要素は、「元祖おたくたち」が作る、「パロディ」である。

大塚と中島は、どちらも「パロディ」を、やおいを構成する要素としている。大塚と中島によるやおいをめぐる言説は、「パロディ」という要素でやおいを構成している。さらに、「パロディ」という要素で構成されたやおいは、「同人誌」という要素と結びつけられて描かれている。

### 2.3 同人誌としてのやおい

同人誌を描き、プロの漫画家（榎本ナリコ）としても活動する野火ノビタは、「やおい」を「アニメやマンガの男性キャラクター同士の恋愛や性行為を描いたもの」で、「現在では、「やおい」といえば「パロディ同人誌」」（野火 2003: 228-230）であると位置づけている。

野火が提示したやおいを構成する要素は、「パロディ」かつ「同人誌」である。さらに野火は、「マンガの男性キャラクター同士の性行為を描いたもの」という要素にも触れている。「同人誌」としてのやおいは、かつて「オタキング」を名乗り、アニメ作品の制作や、おたく批評を行ってきた岡田斗司夫の言説にも現れている。

アニメやマンガのキャラクターに自分のホモ妄想を燃え上がらせて、同人誌とかにしてしまうのが「やおい」（岡田 1997: 216）。

岡田のいう「同人誌とか」の「とか」が何をさすのかは書かれていないのでわからない。「アニメやまんがのキャラクターに自分のホモ妄想を燃え上がらせ」るのは、野火が提示した「アニメやマンガの男性キャラクター同士の恋愛や性行為を描いたもの」という要素と類似している。男性キャラクター同士の恋愛や性交という要素は、大塚が、「美少年ホモ SEX まんが」として提示した要素ともつながっている。

野火と岡田で共通しているのは、「同人誌」、「アニメやまんがの男性キャラクター同士」という要素の二つである。

「アニメやまんがのキャラクター同士」という要素は、「パロディ」として説明されるようになる。精神科医の斎藤環は、おたくを論じる著書で、やおいを「パロディ同人誌」として、記述している。

青少年の登場人物に架空の同性愛関係を想定して作られたさまざまなパロディ同人誌は、ヤマなしオチなしイミなしの「やおい」作品という一つのジャンルを形成した。(斎藤 2000: 177-178)

斎藤はやおいを構成する要素として、「青少年の登場人物に架空の同性愛関係を想定して作られた」「パロディ同人誌」の二つを上げている。さらに、斎藤は、やおいが「ジャンル」として形成されているという要素を加えた。やおいはジャンルとして構成されることによって、他のジャンルとの対比に言及しながら、構成されていくようになる。具体的には、ジャンルとしてのやおいは、オリジナル／パロディの観点で位置づけられる。

野火は、パロディとオリジナルを区別し、ボーイズラブというジャンル名に引きつけて、「オリジナルのボーイズラブ」は、「特に「やおい」とは呼ばれな」としている(野比 2003)。

翻訳家であり、ゲイ文学を紹介した書籍の共同執筆者の一人である栗原知代は、「耽美小説」というジャンルが、「JUNE 小説」「やおい小説」と呼ばれていたことを紹介している。

「耽美」「JUNE」「やおい」という、字面だけではつながりが不明な言葉が、言い換え可能である理由は、「耽美小説」が、「女性が書く男同士の恋愛小説」(栗原 1993: 325-326)を意味しているからである。栗原が定義するやおいは「ハードな性描写のアニパロ」だが、「アニパロ」とは、野火の言葉を借りれば「アニメやマンガの男性キャラクター同士の性行為を描いたもの」をさす。耽美とやおいの呼びかえは、両者に「男同士の恋愛」「男性キャラクター同士の性行為」とする、パロディ／オリジナルの区別を越えた共通性への依拠により可能になる。

このように、やおいは、「男同士の恋愛、性行為」という要素への注目によって、「アニパロ同人誌」に限らず、「オリジナルのボーイズラブ」や、「耽美」「JUNE」などのジャンルと結びついて構成された。パロディ／オリジナルの区別や、ジャンル名の違いを越え、「男同士の恋愛、性行為」を意味することになったやおいは、永久保の表現を借りれば「総称として

のやおい」(永久保 2005)と呼ぶことができる。

## 2.4 総称としてのやおい

中島(前述)は、やおいを論じた単行本を著し、かつてのアニパロではなく、総称としてのやおいを構成している。

「ヤオイ」というのは、「ヤマなしオチなしイミなし」の頭文字からはじまったことばで、ごく荒っぽくいうと主として「男同士の恋愛・SEX 関係」ばかりを素材とした小説や漫画のことである。(中島 1998→2005: 9)

ここでのやおいは、「男同士の恋愛・SEX 関係ばかりを素材とした小説や漫画」である。さらに、中島は自らを「このジャンル(引用者注: やおい)の創始者の一人」と位置づけている。中島は、「男同士の恋愛・SEX 関係」を扱う専門誌『JUNE』の中心人物の一人であり、「ボーイズラブ」の名称がまだ生まれていない時期に、栗本薫名義で『真夜中の天使』などのオリジナル作品を刊行しているからだ。「同人誌」「アニパロ」「オリジナル」「JUNE」「耽美」ではなく、「男同士の恋愛・SEX 関係ばかりを素材とした」という要素で、中島はやおいを構成している。

やおいを、「男同士の恋愛・SEX 関係ばかりを素材としている」という要素のみで説明することは、「パロディ」「同人誌」「オリジナル」の区分的を超えて、やおいを構成することである。このように、「男同士の恋愛・SEX ばかりを素材とした小説や漫画」の総称としてのやおいが構成されていくことになる。

総称としてのやおいは、『JUNE』誌で活動した小説家の榊原史穂美が著した、やおいをめぐる言説にも登場する。榊原は、「やおい小説」という側面からやおいに注目している。(やおい小説)は「女性による、女性を対象とした、男性同性愛をモチーフに使用した小説」であり、「(耽美小説)や(ボーイズ・ラブ)などと名称を変え」(榊原 1998: 6-10)ているものとして構成している。

榊原が、提示している要素は、「やおい小説」は、「男性同性愛をモチーフに使用した小説」で、「耽美小説」、「ボーイズ・ラブ」と名称を変えているというものだ。榊原では、やおい小説も、耽美小説も、ボーイズ・ラブも、「名称」であり「女性による、女性を対象とした、男性同性愛をモチーフに使用した小説」という意味において、区別はない。名称の違いは、名称の違い以上の意味をもたない。その意味で榊原の言説も、中島同様に、総称としてのやおいを構成しているといえる。

研究の分野では、溝口彰子は、榊原の定義を引きながらやおいを説明している。溝口は、やおいを「「やまなし」「おちなし」「いみなし」の頭文字をとった造語」「アニパロの同人誌

作家たちの間で用いられはじめた」とする。そして、ジャンルの名称として「ジュネ」「耽美」「ボーイズ・ラブ」に言及し、やおいの「同ジャンルを指す言葉としては、「ジュネ」「耽美」「ボーイズ・ラブ」がある」（溝口 2000: 209）という。溝口において、「やおい」と、「ジュネ」「耽美」「ボーイズ・ラブ」に、ジャンルとしての区別はない。

後に、溝口は、やおいの定義をジャンルという枠からさらに拡張している。

（やおいは：引用者注）女性作者による、主に女性読者のための、男性同性愛を描いた小説と漫画、および、それら作品群の創作・読書行為を含めての現象全体を指す言葉（溝口 2003: 27）

この定義では、「ヤオイ」は、作品にとどまらず「現象全体」をさす。さらに、「作品群の創作」「読書行為」という要素も、やおいを構成するものとして加えられている。溝口のこの定義は、女性向けポルノグラフィの一つとしてやおいを位置づけた堀あきこ（2009）、守如子（2010）らが、やおいの定義を行うために引いているものである。

永久保は「少年愛」と呼ばれていた「モチーフ」が「やおい」という総称になったとみなしている。

男性同士の恋愛を描いた作品を、女性が描き女性が読む。（中略）当初、“少年愛”と呼ばれていた“男性同性愛”のモチーフは、一〇代から二〇代の女性たちの手によって徐々に作り変えられてゆき、いつしか〈やおい〉と総称されるようになった。（永久保 2005: 1）

永久保は、「少年愛」と「〈やおい〉」を、「男性同士の恋愛を描いた作品」かつ「女性が描き女性が読む」ものであり、「男性同性愛」のモチーフ」という要素において、徐々に作り変えられているものの、つながりがあるものとしている。

やおいをめぐる言説は、「JUNE」「耽美」「ボーイズラブ」「少年愛」などのジャンルや、「パロディ」や「オリジナル」、「同人誌」などの表現の形式や媒体に限らず、「男性同士の恋愛を描いた作品」で「女性が描き女性が読む」ものという意味で、やおいを総称として構成した。名称に注目すると、特にボーイズラブを、やおいと並置する言説が現れている。

西原麻里は、「いくつかの呼び名のあるフィクショナルな女性向け男性同性愛物語のジャンル名を便宜的に〈やおい〉と表記」するとして、「いくつかの」ものの例に、「ボーイズラブ、BL、やおい、ヤオイ」（西原 2010: 63）を挙げている。「ボーイズラブ、BL」を、西原はやおいと同列とし、「少年愛」「耽美」「JUNE」などには、言及しない。

東園子においてもまた、やおいにボーイズラブが並べられている。

「やおい」とは、男同士の恋愛関係を描いた女性向けのマンガや小説等の創作物で、「ボーイズラブ（BL）」という呼称でも知られている。（東 2010: 249-250）

東は、やおいを、「男同士の恋愛的な関係を描いた女性向けのマンガや小説等の創作物」として構成する一方で、「ボーイズラブ (BL)」という呼称でも知られている」として、やおいとボーイズラブ (BL) を並置する。やおいは、「男同士の恋愛」「女性向け」の総称でありつつ、ボーイズラブと並立するものとして、構成されるようになっている。

## 2.5 やおいをめぐる言説に現れる「違い」

やおいは総称として構成される過程で、「違い」に言及されてきた。「違い」とは、以下の4点に整理できる。

①漫画／小説という表現方法の違い。『らっぽり』は、やおいを「やおいまんが」として説明している。ところが、「耽美小説」「JUNE 小説」が「やおい小説」と呼ばれることがあるように、やおいは、小説でもある。

②「ひわいなもの」が描かれている／いないという違い。『らっぽり』ではやおいを、「ひわいな部分だけ独立」したものと説明しているが、大塚では、やおいを「美少年ホモ SEX まんが」とした上で、「もちろん SEX ものじゃない作品もあるのだけれど」と、「SEX」が描かれないやおいがあることを示唆している。「ひわい」と SEX は同義とはいえないが、男性キャラクター同士の絡みを中心とした漫画を『らっぽり』が収録していたことを考えると、『らっぽり』での発言者が「ひわい」の中に SEX を含めていたとみなすことができる。

③オリジナル／パロディという違い。『らっぽり』収録の漫画は、筆者の見限りではオリジナル作品である。『らっぽり』では、オリジナル漫画を「やおい」と呼び、大塚や野火、斎藤は、「パロディコミック」「アニパロ」として、やおいを説明している。

④発表する媒体が、同人誌／商業誌という違い。大塚や岡田は、やおいを「同人誌コミックの一大勢力」、「同人誌とかにしてしまう」ものとして挙げた。栗原、榊原、西原、東らが言及する「ボーイズ・ラブ」という呼称は、書店で見かけることから分かるように、商業誌として流通している作品に付けられている。同人誌として発表されるものだけを、言説は「やおい」としてきたのではない。

物語が「山なし落ちなし意味なし」なのか否かは、『らっぽり』で定義として挙げられたほどの重みでは、他のやおいをめぐる言説では言及されていない。「山なし落ちなし意味なし」については、語源という意味で、大塚、中島、斎藤、溝口らが言及しているにとどまる。

次節ではやおいをめぐる言説から現れた「違い」から、価値判断——いずれかが優秀だとか正統だとか——の問題ではなくて、描き手や読み手にとっての愉しみの違いを考えていく。



### 3. 「違い」に基づいたやおいの「愉しみ」

やおいをめぐる言説では、「違い」について永久保や千田の言及がある。

永久保は〈やおい小説〉のテキスト分析を行うにあたり、漫画や同人誌を、考察の対象外としている。その理由は、漫画と小説、同人誌と商業誌、オリジナルとパロディを異なるものであると判断しているからだ。

「やおいマンガ」はかなり早い段階から、〈やおい〉的要素を持った作品が商業ベースに登場している。そのためマンガのマーケットには、〈やおい〉的マンガと、「やおいマンガ」と、非〈やおい〉マンガが混在しており、それらの区別が非常に難しく、分析上での混乱を招く可能性がある。マンガと比較して、より純粋に〈やおい〉作品のみでマーケットが成立している〈やおい小説〉の方が、分析に適していると判断した。(永久保 2005: 330)

マンガのマーケットでは、〈やおい〉マンガと、〈やおい〉的マンガと、非〈やおい〉マンガが混在しており、区別が難しいが、〈やおい小説〉は、マンガのマーケットと比べ、〈やおい〉作品でマーケットが成立しているという。

同人誌と商業誌という形態の違いを問題にするのは、同人誌はパロディ作品を含み、膨大過ぎるからだという。

〈やおい小説〉は、同人誌と商業誌という二つの形態を持つ以上、両方を総合的に論じなくてはならない。しかしパロディ作品も含み、さらにその内容によって細分化されたジャンル数を持つ同人誌は、本論で論じ切るにはあまりに膨大過ぎる。(永久保 2005: 330)

〈やおい小説〉は、同人誌と商業誌の二つの形態があり、どちらも論じる必要があると永久保は述べている。しかし、同人誌は、オリジナル作品だけで成り立っているわけではなく、パロディ作品も含み、さらに、ジャンルが細分化されている。したがって、同人誌は「論じ切る」には「膨大」なため、永久保は商業誌の〈やおい小説〉に考察の対象を絞り込んでいる。

また、パロディとオリジナルの間に「差異」があることも、永久保は指摘している。

また、パロディとオリジナルのテキストでは、「読者」とテキストとの関係性において差異があり、その差異がテキストの表現のレベルにまで影響を与えている可能性が高いと考えられる。(永久保 2005: 330)

パロディとオリジナルの差異は、「読者」とテキストとの関係性にあり、その差異は、「テ

クストの表現のレベルにまで影響を与えている可能性が高い」という。永久保は、マンガ／小説、同人誌／商業誌、パロディ／オリジナルをそれぞれ異なったものとしている。

永久保の論点は、〈やおい小説〉を論じることを、受け攻めと結びつけるということだ。

〈やおい小説〉を論じることは、〈受〉と〈攻〉が何者かを知ることであり、男性同士の設定の理由を解明することであり、女性「読者」を惹き付ける魅力の謎を解き明かすことでもある。(永久保 2005: 8)

永久保では「〈やおい小説〉を論じることは、〈受〉と〈攻〉が何者かを知ること」として示されている。受け攻めをめぐるのは、千田は、「典型的な腐女子像」と千田自身が「かけ離れている」と表明している。

男性同性愛を題材とした作品を愛好しているという点では共通するとしても、(略) 男同士をみるとすぐにカップリングを妄想してしまう、場合によっては人間でなくても、鉛筆と消しゴムだけでもどちらが受けでどちらが攻めか、ひとりでも時間も潰せるといった「典型的な腐女子」像とはかけ離れている、ような気がする(千田 2012: 65)

千田での「典型的な腐女子」は、「男性同性愛を題材とした作品を愛好している」ことを特徴とする。千田は、自らを「男性同性愛を題材とした作品を愛好している」としているものの、自らは「典型的な腐女子」像とはかけ離れているという。「典型的な腐女子」像とは、男同士をみるとすぐにカップリングを妄想したり、人間でなくても、受けと攻めを妄想したりすることで、いくらでも時間が潰せる人たちをさす。千田は、「腐女子もまた、一枚岩ではない」(千田 2012: 65) ことを前提に、かつての少女マンガファンが現在のBLの読者となる現象を指摘する。

少年少女たちが共通して楽しめるアイドルや歌謡曲が消えてしまったように、少年マンガというジャンルは少女を読者として獲得しながら残っていると、少女マンガというジャンル自体が存亡の危機にあるような気がしている。(千田 2012: 68)

その一方で、元「少女」たちがBLの世界に続々と戻ってきているという現象がある。実はわたし自身がそうであるのだが、腐女子ブームの少し前に久しぶりにBLマンガを読み始めた。既婚／独身を問わず、花の24年組で育った世代、アラフォー世代が、BLマンガに「はまる」という現象はよく見られ、わたしもそういった何人かと知り合いになった。(千田 2012: 68)

「花の24年組」と呼ばれる少女漫画家たちが、「少年愛」を描いて注目されたのは、70年代である。かつて少女漫画を読んでいた人たちが、「BLマンガに「はまる」」という現象は、よく見られるという。千田は、「少年愛」少女漫画と、「BLマンガ」はどちらも読んだり「は

ま」ったりするものだが、やおいはBLマンガや少年愛少女漫画とは違うものとしている。永久保が、〈BL小説〉を受と攻を語ることだとして分析したのとは対照的に、千田は、やおいやBLに登場するキャラクターの受け攻めの役割であるとか、BLのポルノグラフィとしての側面に関心をもたないとする。

ところでやおいを愛するひとたちが、受けと攻めをめぐって血で血を洗う争いを繰り広げてきた歴史があるというのに、(略)カップリングのあり方への関心のなさは、やはりやおい愛好者と貴腐人、少なくともわたしとの際立った違いのように感じている。(略)やおい愛好者には怒られるかもしれないが、許して欲しい。性交渉以前の少年愛の世界には、受けも攻めもいなかった。(略)

そういう意味では、BLのポルノグラフィとしての側面、セクシュアルなシーンは、自分にとってそれほど重要ではない。(千田 2012: 70)

やおいとカップリングは、カップリングをめぐって「血で血を洗う争いを繰り広げてきた」というほどの関係として示されているが、千田は、「カップリングのあり方への関心のなさ」を、やおいと自らとの間の「際立った違いのように感じている」。なぜ、「際立った違い」が生じているのかについて、千田は、「従来の少女漫画ファン」と、それ以外の読者との間にある違いに求めている。「従来の少女漫画ファン」の他に、千田は、「男同士の熱い友情」に萌えた八〇年代、九〇年代のやおい」と、「ジェンダーを娯楽化している最近のBL好きの少女たち」(千田 2012: 67)を挙げ、「従来の少女漫画ファン」、「八〇年代、九〇年代のやおい」、「最近のBL好きの少女」は、カップリングや受け攻めをめぐって異なる楽しみ方をしていることを論じている。千田が挙げているのは、いずれも、「女性向け」の「男性同士の恋愛を描いた漫画や小説」の愛好者である。けれども、その間には、違いがあるという。

皆の感じるBLの魅力はそれぞれある。人生いろいろ、萌えもいろいろ、なのである。(千田 2012: 71)

「それぞれ」「いろいろ」という言葉は、「BLの魅力」が、一様ではないことを意味している。

やおいの楽しみの違いに目を向けないとすれば、女性がやおいやボーイズラブ作品を読んだり、創作したり、あらゆるものを対象に受け攻めのカップリングを想像することの楽しみには、ほとんど広がりがない、貧乏なものにとどまってしまう。少なくとも、違いを顧みないでやおいを論じることは、やおいから楽しみを得ている女性にとっては、自分の楽しみが無かったことにされてしまうような抑圧として、はたらくことになる。

やおいをめぐる楽しみには、本稿で触れただけでも、永久保、千田が示したような「違い」がある。「それぞれ」「いろいろ」な楽しみを、個別に明らかにすることを通じて、やおいか

ら、女性の愉しみのあり方を示していくことが可能となるのだ。

#### 4. むすびにかえて

本稿では、1979年から2010年にかけてのやおいをめぐる言説において、やおいという言葉の使われ方が変化してきたことを整理し、やおいが、「女性向け」の「男性同士の恋愛」を描いた作品やジャンルの総称として、ボーイズラブと並置されるようになったことを示した。

まず、やおいは、同人誌『らっぽり』では、①山なし落ちなし意味なし、②ひわいな部分だけ独立、という二つの要素で構成されていた。次に、やおいは「同人誌」という要素で構成され、さらに、「パロディ同人誌」という要素となっていた。さらに、やおいは、ジャンルの一つに数えられるようになり、「JUNE」や「耽美」「少年愛」「ボーイズラブ (BL)」など、「女性向け」に「男性同士の恋愛を描いた」作品の「総称」として構成されていった。最後に、「総称」としてのやおいは、ボーイズラブと並置されるものとして構成された。本稿では、やおいをめぐる言説に登場するやおいを構成する要素を整理することを通じて、やおいは、言説によって構成され、常に変化を続けているものだというを明らかにした。

変化を通して整理する過程には、やおいをめぐる言説が言及している「違い」が現れていた。「違い」には、「漫画／小説」「ひわい」なものが描かれている／いない「オリジナル／パロディ」「同人誌／商業誌」の4つの要素を抽出することができた。

続いて、「違い」に言及した永久保、千田の論考を援用しながら、「女性向け」に「男性同士の恋愛を描いた」作品の愉しみは、「違い」に基づいていることを論じた。

本稿を締めくくるにあたって、今後の課題を提示する。本稿で言及した「違い」は、女性の愉しみの観点から捉えることができる。さらに、愉しみは様ではなく、多様性や豊かさ示していた。やおいを「違い」から見ることによって、女性の愉しみの多様性や豊かさなどのようなものであるのかの考察は、筆者の今後の課題としたい。

#### 参 考 文 献

- 東 園子, 2010, 「妄想の共同体——〈やおい〉コミュニティにおける恋愛コードの機能」東 浩紀・北田暁大編『思想地図 Vol. 5 特集・社会の批評』日本放送出版協会, 249-274.
- 波津彬子他, 2001, 「らっぽり特別企画 やおい対談 4 大巨匠 夢の共演!」『小説 JUNE』(129), 319-322 (→1979, 『らっぽり』(同人誌))。
- 堀あきこ, 2009, 『欲望のコード——マンガにみるセクシュアリティの男女差』臨川書店。
- 金田淳子, 2007, 「マンガ同人誌——解釈共同体のポリティクス」, 佐藤健二・吉見俊哉編『文化の社会学』有斐閣, 163-190.
- 笠間千浪, 2001, 「《解釈共同体》としての「やおい」サブカルチャー——消費社会の高度化と女性たちのオルタナティブな語り」三宅義子編『日本社会とジェンダー』明石書店, 219-246.

- 栗原知代, 1993, 「耽美小説 概論1 耽美小説とはなにか」柿沼瑛子・栗原知代編著『耽美小説・ゲイ文学ブックガイド』白夜書房, 325-335.
- 溝口彰子, 2000, 「ホモフォビックなホモ, 愛ゆえのレイプ, そしてクィアなレズビアン——最近のやおいテキストを分析する」伏見憲明編『クィアジャパン』VOL. 2, 勁草書房, 193-211.
- , 2003, 「それは, 誰の, どんな, 「リアル」? ——ヤオイの言説空間を整理するこころみ」イメージ&ジェンダー研究会『イメージ&ジェンダー』4, 彩樹社, 27-55.
- 守 如子, 2010, 『女はポルノを読む——女性の性欲とフェミニズム』青弓社。
- 永久保陽子, 2005, 『やおい小説論——女性のためのエロス表現』専修大学出版局。
- 中島 梓, 1991, 『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房。
- , 2005, 『タナトスの子供たち——過剰適応の生態学』筑摩書房 (→1998, 『タナトスの子供たち——過剰適応の生態学』筑摩書房)。
- 西原麻里, 2010, 「マスメディアが映し出す〈やおい〉の姿——言説分析による」『論叢クィア』(3), 62-85.
- 野火ノビタ, 2003, 「『やおい論』『大人は判ってくれない』太田出版。
- 岡田斗司夫, 1997, 『東大オタク学講座』講談社。
- 大塚英志, 2001, 『定本物語消費論』角川書店 (=1989, 『物語消費論』新曜社)。
- 榊原史穂美, 1998, 『やおい幻論』夏日書房。
- 斎藤 環, 2003, 『博士の奇妙な思春期』日本評論社。
- 佐々木悦子, 2005, 「『やおい』の起源 概論」大塚英志プロデュース『COMIC 新現実 Vol. 4』角川書店, 414-421.
- 千田有紀, 2012, 「貴腐人, もしくは汚超腐人の密かな愉しみ」『ユリイカ』44 (55) 620, 64-71.
- ヤマダトモコ, 2007, 「プレ「やおい・BL」という視点から——「お花畑」を準備した作品たち」『ユリイカ 6 月臨時増刊号』39 (7) 536, 123-131.

Summary

The Construction of discourses on YAOI

Aida Miho

The objective of this article is to clarify, from the perspective of gender, how it has influenced on the pleasures by women, producers and/or readers of YAOI that YAOI has been told as “works dealing with male-male love”.

So far YAOI has been read and interpreted from the perspective of gender and sexuality as “works describing male-male love and sex”. These works show that women enjoy love and sex between men and it may deconstruct and subvert the heterosexist and gender norms.

This article focuses on how the word “YAOI” developed and places emphasis on that YAOI is not only the “works on male-male love” but also a new form of expression of MANGA.

The fields of the discourses over “YAOI” definitions moved gradually from the ones made by producers and readers of “YAOI” to the ones made by researchers. Here I will deal with the three fields including “YAOI” definitions: “conversations” or “dialogues” in DOJINSHI (self-published works), essays and critiques by those produce and read DOJINSHI, and the researches which deal with “YAOI” as “the works on male-male love and sex”.